

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 3 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02115

研究課題名（和文）北アイルランド紛争後社会の観光と住民集団間関係

研究課題名（英文）Tourism and inter-group relations in Northern Ireland's post-conflict society

研究代表者

福井 令恵（FUKUI, Norie）

法政大学・キャリアデザイン学部・准教授

研究者番号：50724035

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：1960年代末に始まった北アイルランド紛争は、1998年の和平合意をもって一応の政治的解決を遂げたが、現在も住民集団間の対立感情は残っている。本研究では和平合意後に積極的に推進されている紛争跡地観光によって、ふたつの対立してきた住民集団間の関係性に変容があるのかどうかを検討した。コミュニティでは、以前から存在した社会的な課題が、顕在化している。他方で、一部情報共有や協力関係がみられたこと、また多様な紛争経験の表象がされていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究プロジェクトは、長期紛争により深刻な分断状態に置かれたコミュニティを対象に、和平合意という政治決着後の地域の課題を観光を手掛かりに明らかにするものである。ここではコミュニティ関係者が外部者に提示する北アイルランド紛争の経験に関する語りと表象を検討した。北アイルランドには、イギリスのEU離脱により再度の政治的な不安定化がもたらされているが、地域住民の抱える困難と葛藤、困難を解決しようとする試みについて内在的な視点から分析している点に、本プロジェクトの社会的・学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The Northern Ireland conflict reached a political and constitutional resolution in 1998. However, the feelings of antagonism between the two ethnonational groups (Unionist/Nationalist) have not disappeared. This study examined whether tourism in a post-conflict society provided an opportunity to change the relationship between them. In the local communities where conflict tours were being conducted, social issues that have existed for a long time became more apparent. On the other hand, information sharing and cooperative relations were observed. The representations and narratives of the conflict were diverse, depending on the types of tour operators and museums.

研究分野：地域・文化研究（アイルランド、北アイルランド、イギリス）

キーワード：住民集団間関係 分断社会 都市論 表象 紛争跡地ツアー

## 1. 研究開始当初の背景

北アイルランドでは、1960年代末に二つの住民集団（UKの一員としてのアイデンティティを持つユニオニストと、アイルランド人としてのアイデンティティを持つナショナリスト）の間で北アイルランド紛争が起こり、1998年に和平合意が締結されるまでの約30年間、住民集団間の争いが続いた。紛争の被害は、とりわけ都市部の、二つの住民集団が境を接して居住している地区（インターフェイス・エリア）を中心とした、比較的狭い範囲の空間に集中した。和平合意後は、二つの住民集団間の対立感情の解消と地域経済の振興の2点が、和平プロセスを進展させるうえで、重要な社会的課題となった。

観光は、地域社会の経済復興への期待から推進されるようになり、北アイルランドの最大都市のベルファストでは、紛争の痕跡をめぐるツアーが実施されている。そこでの主要な観光商品は、都市空間内に存在する分断の壁（Peace Wall）と壁画（Mural）である。ピースウォールと呼ばれる分断の壁は、ユニオニストとナショナリストの労働者階級の居住地区の境に設置されているものである。壁画は自分たちの文化・歴史を自分たちの住むエリアに描く地域メディアである。視覚に強く訴えるこの壁画は、紛争時代に二つのそれぞれの住民集団が、自らの主張を表現するメディアとして広く利用した。和平合意の機運が高まった1990年代以降、壁画を単なるプロパガンダではなく、コミュニティ・メディアとして捉える視点が出てきた。とはいえ、「目に見える」かたちで二つのコミュニティの違いや対立が表されることも多いため、政府・行政からは、北アイルランド社会の対立を象徴し、都市空間内に「分断」を刻み込むものとして否定的に捉えられもした。分断を消し社会統合を目指す都市計画と、北アイルランド紛争の跡地をめぐる観光の推進は、したがってしばしば現場では矛盾するものとして捉えられる。

地域コミュニティでは、こうした政府・行政の政策の影響を受けつつ、自分たちのコミュニティで経験した歴史や記憶を、訪問者（観光客を含めた外部者）へ表現し続けている。そこには、自分たちの歴史・文化・主張への承認要求が存在する。観光客や訪問者などの「外部者」にどのような出来事をどのように伝えるのか、交渉がみられる。

観光は、北アイルランドの和平のため南北アイルランド政府が協力し推進する6つの重点分野の一つに指定されており、紛争後社会の復興と発展をもたらすものとして期待されている。他方で、紛争跡地ツアーの現場になっているコミュニティでは、以前から存在した社会的な課題が、顕在化している。エスノ・ナショナルな対立以外に、階級間の亀裂（紛争の影響をより直接的に受けた労働者階級の住民と、紛争から比較的距離をとることができた中産階級）、地域開発・経済投資のコミュニティ間の格差に対する不満などである。紛争後社会の分断解消と社会統合という課題に対し観光がどのような役割を果たしていくのか、外部（者）との接触を契機に変化を見せるコミュニティの現状を研究する。

## 2. 研究の目的

北アイルランドの紛争後社会において、和平合意後に積極的に推進されている紛争跡地観光によって二つの対立してきた住民集団間の関係性に変容があるのかどうか、ある場合はどのように変化したのかを明らかにすることを目的とするものである。調査対象地は紛争時代、対立関係にあったユニオニスト系とナショナリスト系の住民集団が、境を接して居住する地区（インターフェイス・エリア）を主としているが、こうした地区は現在も住民の対立感情が強く残る。イギリスのEUからの離脱（ブレグジット）によってもたらされた政治的な不安定化の中で、この地域の住民間関係を理解することは、とりわけ重要性が増してきている。

## 3. 研究の方法

研究は以下の(1)～(3)の方法で進めたが、コロナ禍による渡航中止のため、(4)の方法を追加した。

### (1) ベルファストのツアーにおける、紛争の表象・語りについての調査

和平合意後20年以上経過し、ベルファストでは多数のツアーが実施されている。紛争跡地をめぐるツアーに限っても、近年様々なかたちで実施されている。バス・ツアー、タクシー・ツアー、ウォーキング・ツアーといったツアーの種類その他、観光実施者も世界展開しているツアー会社から地域の紛争当事者（元囚人の団体）などが主催しているものまで、多岐にわたっている。そのため、多様な形態の複数のツアーに参加をし、誰が何をどのように見せるのか、紛争経験の表象と語りについて調査を行うこととした。

バス・ツアー、タクシー・ツアー、ウォーキング・ツアーはそれぞれ異なるルートをめぐるため、どのような場所をめぐるのか確認し、それぞれの場所での語りや説明について調べた。

## (2)ミュージアムの展示の調査

北アイルランドのベルファストおよび第2の都市であるデリーにある、紛争経験をテーマとして扱うミュージアムを調査した。両都市には、国立ミュージアムの他、コミュニティ関連団体が運営するミュージアムなどが和平合意後設立されている。それぞれの展示方法や館内ツアーなどの特色や運営について調査した。こうしたミュージアムにおける紛争の表象は、北アイルランド社会における紛争経験の提示の仕方について考察する際、重要である。

なお、訪問したミュージアムは以下のものである：The Museum of Free Derry, Tower Museum, Irish Republican History Museum, East Belfast Loyalist Conflict Museum, Crumlin Road Gaol, アルスターミュージアム（特に紛争写真展 Conflicting Images Photography from the Northern Irish Troubles）。

## (3)モニュメントおよび壁画の現状と変化についての調査

ベルファストとデリーの二都市において実施した。本研究以前に調査をしていた地域で引き続き調査を実施し、データのアップデートを行った。またこれまで十分にカバーできなかったデリー（The Fountain, Bogside, Bishop Street 地区）についても調査を行った。

## (4)インターフェイス・エリアの課題についての調査

本研究課題が始まった当初はフィールド調査をもとに研究を進める計画であったが、本研究の研究期間のうち3年間はコロナ禍により渡航ができなかった。そのため、研究計画を一部変更して、インターネット上で公開されている資料をもとに、観光に限定せず、インターフェイス・エリアの地域の課題を検討した。

# 4. 研究成果

## (1) ベルファストのツアーにおける、紛争の表象・語りについての調査

紛争跡地をめぐるバス・ツアーやタクシー・ツアーが始まったのは和平合意後まもなくという早い時期であったが、近年ではウォーキング・ツアーも多数実施されるようになってきている。バス・ツアーやタクシー・ツアーのルートは、紛争の痕跡が残るインターフェイス・エリアを含むが、さらにインターフェイス・エリアのなかでも一部の場所に限定されている。バス・ツアーでは、大通りから壁画やモニュメントがよく見える場所をめぐり、タクシー・ツアーは住宅地のなかにあるメモリアル(記念碑、壁画)をめぐるルートをとるという違いがある。タクシー・ツアーでは、一般にガイドを兼ねた運転手が紛争について説明をするが、運転手はインターフェイス・コミュニティ出身である場合と、当該コミュニティ出身者ではない場合がある。どちらの場合でも壁画や記念碑をめぐり、訪れる場所は、しばしば重なる。しかし同じ場を訪れても、そこでの語りには違いがみられる。ウォーキング・ツアーについても、複数のツアーが実施されている。実施者の違いにより、紛争経験の語られ方には明確な違いがみられた。

## (2)ミュージアムの展示の調査

紛争経験を展示するミュージアムの数は和平合意後増加している。アルスターミュージアムの展示は文書・ポスター・壁画など多様な資料を用い、複数の視点から紛争経験を提示するという方法を採用している。コミュニティ運営のミュージアムは、地域の住民から展示資料を提供してもらい、コミュニティの経験としての紛争を提示している。コミュニティが経験した歴史という視点が明確である。そのため、ナショナリスト、ユニオニストといった立場だけではなく、「地域の戦い(闘争)」により力点を置いた内容になっている。

また、コミュニティ運営のミュージアムのスタッフは、多くの場合当該地域出身者である。厳しい対立関係にある/あった関係者同士、紛争経験の展示に関して情報を互いに得るなどの交流があることが明らかになった。こうしたスタッフの交流の在り方については、北アイルランドの紛争表象を考えるうえで非常に重要である。ただし、コロナ禍によってフィールドワークの実施が制限され、本研究課題の期間に聞き取りができたミュージアムが少ないため、この点に関しては今後さらなる現地調査が必要である。

## (3)モニュメントおよび壁画の現状と変化についての調査

モニュメントに関しては、インターフェイス・エリアでのあらたな設置がみられる。壁画については、以前と比較し、全体として描き替えの期間が長くなっている傾向がみられた。なかにはメンテナンスをされず、消去もされずに放置されている壁画が多数ある地区もある。他方で、いくつかのエリアでは、壁画の制作が活発になっている。シティセンター周辺の商業地区の他、バス・ツアー、タクシー・ツアー、ウォーキング・ツアーのいずれもが出向く International Wall と呼ばれる場とその周辺、また依然として準軍事組織の影響が一定程度残る一部の東ベルファストの地区である。

2000年代前半からこれまで行ってきた壁画の変化の調査から、壁画はアニバーサリーの年に

新たに描かれたり、描きなおしがされたりする傾向があることが明らかになっている。本研究課題の期間中も北アイルランド議会発足、アイルランド自由国成立から 100 周年など大きな記念にあたる年があるが、壁画が活発に描かれているわけではなかった。コロナ禍のなかで活動自体が控えられた点が影響している可能性も考えられる。壁画の制作活動が低調になっている点が一時的なものなのか、それとも今後も続く傾向なのか、動向を見ていく必要がある。

興味深い動きとして、ユニオニストのコミュニティとポーランド系移民のコミュニティとの間で共同の壁画制作など文化交流が生まれていることが確認された。和平合意以降、北アイルランド社会では、エスニックマイノリティが増加しているが、彼らの文化活動についての研究はまだ少ない。様々なマイノリティ・グループが北アイルランド社会でどのような文化活動をしているのか、またそうした活動によってユニオニストやナショナリストの住民集団とどのような関係を作り上げていくのか、今回確認された活動は、こうした点を今後明らかにするための手がかりになると考えている。

#### (4) インターフェイス・エリアの課題についての調査

2020・2021・2022 年の 3 年の間海外渡航ができず、フィールド調査を行うことができなかった。そこで、日本国内で進められる研究に内容を変更した。具体的には、もともとフィールド調査を行う予定だった調査対象地で政府が進める分断の壁(ピースウォール)の撤去政策に注目し、そこから住民集団間関係を検討することとした。この撤去政策については、インターネット上で文書や資料の多くが公開されている。また調査地についての関連資料や大学の調査報告が複数出版されたため、それらの資料を読み、インターフェイス・エリアの住民のピースウォールに対する意識について整理した。この地区で進められる分断の象徴を撤去する政策について検討し、論文として発表した。また、アウトリーチとして、商業誌(キネマ旬報)に、インターフェイス・エリアの現状について、解説文を寄稿した。

紛争後の北アイルランド移行期社会を考える本研究テーマにおいて、こうした政府の政策とそれに対する住民の反応は重要であると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 福井令恵	4. 巻 第20号
2. 論文標題 北アイルランドの性的マイノリティをめぐるポリティクス	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 法政大学キャリアデザイン学部紀要	6. 最初と最後の頁 57-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 福井 令恵	4. 巻 第19号
2. 論文標題 ピースウォール撤去政策とインターフェイス・コミュニティ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 法政大学キャリアデザイン学部紀要	6. 最初と最後の頁 117-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 福井令恵	4. 巻 第17号
2. 論文標題 北アイルランドの観光と国境を越えた関係性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 法政大学キャリアデザイン学部紀要	6. 最初と最後の頁 145-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 福井令恵	4. 巻 第16号
2. 論文標題 紛争後社会と観光 ベルファストの労働者階級の居住地区（和平合意後20年）を事例として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 法政大学キャリアデザイン学部紀要	6. 最初と最後の頁 123-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 福井令恵
2. 発表標題 和平合意後20年のベルファストの観光 都市空間と表象
3. 学会等名 アイルランド歴史研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 三隅一人、高野和良、吉武由彩、益田仁、松本貴文、山下亜紀子、藤田智子、井上智史、孔英珠、里村和歌子、大畠啓、森康司、松岡智文、桑畑洋一郎、福井令恵、挽地康彦	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 ジレンマの社会学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------